



地域とともに生きる



安心できるコミュニティーをつくる コミュニケーションの震源地

「お年寄りや子どもが安心して暮らせる
コミュニティーをつくるには、コミュニケーションが大切」。
そんな考えをベースに、
グループホームや小規模多機能型居宅介護といった
介護保険事業にとどまらず、
地域の居場所づくりや地域通貨など、
さまざまな地域交流の仕掛けをつくり続ける
NPO法人じゃんけんぽん。
目の前の課題は多いが、決して焦らずあきらめず、
理想の地域づくりに奮闘している。



NPO法人じゃんけんぽん

小規模多機能の家「じゃんけんぽん国府」

群馬県高崎市引間町2-2
TEL: 027-360-6662



明るい日差しが差し込む小規模多機能の家「じゃんけんぼん国府」のリビング。お昼を食べ終わり、ちょっと一息



代表の井上謙一さん。「ボランティア、民生委員と連携して、地域の問題の早期発見をするとともに、かかりつけ医や行政とのネットワークをつくってきたい」



近所に住む利用者の家族やボランティアが気軽に顔を出せる雰囲気。じゃんけんぼんにはある



一人ひとりのペースに合わせて個別に食事介助。重度になってもできる限り在宅生活を支え続ける

地域通貨「しるく」で住民の助け合いを促進

1998年、井上謙一さんは勤めていた建設会社の倒産をきっかけに、理想の高齢者介護をめざしてNPO法人じゃんけんぼんを創設した。制度に乗らない宅老所から始まり、現在はグループホーム2カ所と小規模多機能型居宅介護事業所を展開している。

10年の活動を通して感じているのは、「自分たちの力だけでは決して地域で高齢者を支えることはできない」ということだ。

そこで地域住民の力を活かし、ちょっとした助け合いを活性化させようと、高すぎず、タダでもない、ちょうど良いバランスを生み出す道具として地域通貨の導入を提案。2002年から地域元気マネー「しるく」(1枚500円相当)の運用を開始し、地域の商店街も巻き込んだ成功事例として各方面からも注目された。

たとえば、ある70代の女性は、足が少し悪いものの、特技を活かして地域で華道を教えている。そこで得た「しるく」を使って、送迎サービスを利用し、パソコン教室

に通っているという。

しかし、現在は月50〜60件程度と利用が伸び悩んでいる状況だ。例に挙げた70代の女性のように、利用者とサポーターどちらの立場でもある人は多くなく、役割が分かれてしまっているのが要因の1つだという。それでも、「利用者が1人でもいる限りは続けたい。団塊の世代の大量退職で、今後はサポーターも増えてくるのではないかと井上さんは期待する。

家族の支えあつての在宅生活 いかに家族を支援するかに腐心

もう1つ、じゃんけんぼんが大切にしているのが、家族の支援だ。2カ月に1度の運営推進会議の前に、家族会を開催。普段、誰にも言えない思いを吐き出す場をつくるとともに、在宅に必要な知識を伝える研修会も開催する。

「ベテランのご家族であっても、ケア技術が自己流で、危険を伴う場合は少なくない。しかし、本人は何年も毎日介護してきたという自負がある。『介護専門職が教えてあげる』という態度では、受け入れてもらえないこともある。本人が納得のうえ、自ら学ぼうとする

じゃんけんぼんでは、毎月2回、地域の子どもたちを連れて日帰り泊まりのキャンプを行う「自然教室」を開催。参加費は1,000円と赤字事業だが、「未来の地域の支え手をたくましく育てるために」と続けている(写真提供: じゃんけんぼん)



建設会社の事務所を改装して作った、ふれあいの居場所「近隣大家族国府」。じゃんけんぼんの事業所はすべて、理解ある地主から低額で借りているという



自分たちだけでは支えきれない だから地域の力を活かしたい



家族会での研修のひとつ。職員をモデルに、家族にオムツの当て方を教えるなど、具体的、実践的な内容を実施する(写真提供: じゃんけんぼん)



「近隣大家族国府」内は、和室(トビラ写真)のほか、カラオケ機材を完備。地域住民や利用者が毎日自由に使うことができる

地域通貨「しるく」。群馬県指定重要無形文化財保持者の染色家・藍田正雄さんが、群馬県産の絹布を使い、江戸小紋の手染めでつくっている



には、やはりコミュニケーションが必要なのですと井上さん。
そのためにも、まずは話を聞いて信頼関係を築くことが大切という。一見遠回りに見えても、結局はそれが一番近道となるのだ。
「時には、介護とまったく関係のない話を聞くこともあります。職員からも『そこまで事業所がすべきなのか』と疑問の声があることがあります。しかし、家族が抱

える問題を解消しないことには、結局、利用者の在宅生活を支え続けていくことはできないのです」と井上さんは話す。「高齢者が住み慣れた地域で暮らす」という目標を達成するには、介護保険という枠にとられない支援が必要だと考えている。
昨年7月からはふれあいの居場所「近隣大家族国府」を小規模多機能の隣にオープンさせた。いつでも使える地域住民の交流の場として開放している。
「ここに通っていた人が、今度高崎市の自宅をオープンハウスにするそうです。地域に貢献しながら、自分自身も地域の眼に守られる。地域交流の尊さをここで実感した人が、どんどん自宅を地域に開放してくれば」(井上さん)
じゃんけんぼんから地域へと、コミュニケーションの波が広がっている。

(撮影: 関口宏紀 文: 編集部)